Ⅳ－153

輪島市における都市計画マスタープラン策定時の都市問題に対する住民の認識の変化に関する研究

早稲田大学理工学部土木工学科　学生員　原　佳宏
早稲田大学理工学部　正会員　尹　祥福
早稲田大学理工学部　正会員　中川　義英

1. 背景と目的

1992年、都市計画法が改正され、日本中の都市計画区域を持つすべての市町村に「市町村の都市計画に関する基本的な方針」（以下、本稿では都市計画マスタープランと呼ぶ）の策定が義務付けられ、さらにこれの策定に関してはその中で「住民意見の反映のための必要な措置を講ずること」が求められた。

都市の将来像を考えるといった意味あいの強い都市計画マスタープランの策定に関する住民参加は、今までに各地で行われてきたような直面する都市問題や立て替え問題などに対する参加とは異なり、まず問題意識を持った住民が都市について学習を行い、自ら問題点を発見して、今まで持っていた問題意識をふまえながら新しく発見した問題について考えるという過程を経て問題を構造化してゆくことが重要である。このプロセスの中で問題点を発見する事を本研究では"気付き"と呼ぶこととする。

本研究では、都市計画ﾏｽﾀｰﾌﾟﾗﾝマスタープラン策定時の住民参加によって住民が今まで意識していなかった都市問題に気付き、その問題を自らの問題として認識する可能性をｹｰｽｽﾀﾃﾞｨを通して検討することを目的とする。

2. ワークショップと参加住民

現在住民参加に起こりうる問題点として最も重要なもののひとつに、参加者の固定化が挙げられる。市町村単位での参加となると実際の参加住民は全住民の2%にも満たないことがほとんどである。当然ながら問題意識の高い人は参加住民になる訳だが、そうではない人達をどう巻き込んでゆくかが問題である。

ここで注目したいのは公聴会やワークショップなどに参加した住民の言動・行動にある。特にこういった場において発言・行動などを伴った積極的な参加をする住民のことを本稿では参加住民と呼ぶこととする。この参加住民の行動・活動は、近隣住民を巻き込んでいく可能性があり、公聴会などには出席しない大多数の住民の意見をどう住民参加に反映させるかという点において重要な役割を担っている。住民参加において、大多数の合意を得るためには参加住民の意識の向上を図るべきである。

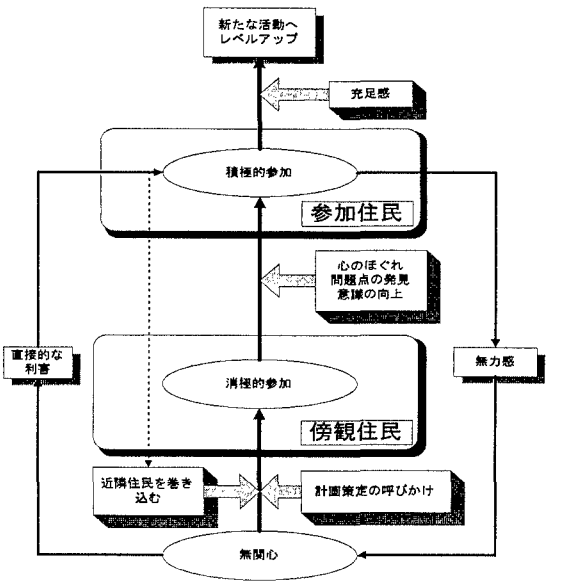

図. 参加住民の向上プロセス

3. ｹｰｽｽﾀﾃﾞｨ地区とする輪島市の現状と問題について

輪島市は、石川県の能登半島の先端部（奥能登）に位置する人口約３万人の都市である。現在は漆器と朝市を中心とした観光都市である。しかし、近年の漆器産業の不景気や、若者が働ける場所がないこと、漁業、漆器業の後継者不足、観光需要に対する交通網の未整備、そして港湾の大規模埋め立て計画など都市問題を数多く抱えている。このような問題に対して一部の住民は自分の危機意識が強い問題に対して団体を形成し学習をしているが、今までに行政や第三セクターなど中立的な立場からの住民参加が行われるなどの経験はなく、各々の都市問題に対する意識の表現や共有、総合化などがなされてこなかった。

keywords:都市計画マスタープラン、住民参加、住民意識
〒165　東京都新宿区大久保3-4-1　TEL.03-5286-3398　FAX.03-5272-9975

表 1. 主な参加対象者

	一般住民	住民団体	主婦	高校生	商店主
ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ	○		○		
ｶﾞﾘﾊﾞｰ地図	○		○		
高校ｶﾞﾘﾊﾞｰ地図				○	
ﾋｱﾘﾝｸﾞ		○			○
よらんかいね談義		○			
ﾆｭｰｽ	○	○	○	○	○

4. 評価・分析

９６年度から輪島市で行われている様々な形での住民参加を複合的に重ねてゆくことの結果として、住民各層の持つ抽象的な都市問題が相互認識されることを見る。

本研究ではその中でも、市役所で行われたガリバー地図と、高校で行われたガリバー地図と意見箱の内容をもとに行われた都市問題に関する演劇ワークショップの結果を比較検討し、参加住民の意識の向上を見ることにする。（表１参照）

輪島市民と高校生の街に対する意見を調査するために、輪島市役所ロビーと、石川県立輪島高等学校・同輪島実業高等学校にてガリバー地図を行った。（表２，３参照）

市役所で行われたガリバー地図は、ゴミ問題や自然環境、埋め立て問題、交通問題などの指摘が多かった。

一方、高校で行われたガリバー地図は若者の居場所や遊び場に対する不満が非常に多く見られ、両者の違いは明確なものであった。高校生はガリバー地図ではほとんど良いところを指摘していない。また、意見箱の内容では店舗や遊び場が存在しないこと、交通の便が非常に悪いことが数多く指摘されている。

以上の点をふまえ、子供と交通、若者、海の埋め立て問題に焦点を当て、それぞれの都市問題について、集まった住民にストーリィを創ってもらい演劇にして見に来た人たちに問題を意識してもらう、というワークショップを行った。

当日の参加者 22 名中、高校生は 2 名だったにもかかわらず、高校の意見箱の投書をもとに創られた高校生をテーマにした若者の問題に一番関心を示した人が 75%と圧倒的に多かった。これは、あまりに日常化しすぎていて人から言われないと気づかないくらい根の深い問題だったのではないだろうか。

市役所でのガリバー地図では 236 点のうち、若者に関する指摘は 2 点しかなかったことを考えると、今回の演劇を見た住民はこの問題に気づいたといえよう。また、このような問題に関して知っていたかという質問に関しては、あまり知らない、知らないと答えた人はいなかった。意識があるにしろ、無意識のうちにしろ、このような問題を身近に感じていることが分かる。そして、今後何かしたいかという質問に関しては 18.8%の人が何かしたい、75%の人が考えたいと答えている。次回以降のワークショップにも 94.1%の人が参加したいと答えている。

今回のワークショップは、アンケート結果より参加者が都市問題に関して前向きな関心を示した点において充実していたと言える。

表 2. 市役所のｶﾞﾘﾊﾞｰ地図の集計／高校生対象のｶﾞﾘﾊﾞｰ地図の集計

	川・海	山	汚・美	生活	観光	交通	子供	若者	公園	その他	なし
嫌い	4/3	1/0	10/11	2/5	2/1	21/16	3/1	0/3	4/7	7/5	14/0
好き	15/1	2/0	7/1	3/0	3/0	2/0	13/0	0/0	7/0	3/3	21/0
気になる	14/2	0/3	14/3	1/3	5/0	10/3	4/0	2/4	10/7	12/3	20/0
集計	33/6	3/3	31/15	6/8	10/1	33/19	20/1	2/7	21/14	22/11	55/0

表 3. 高校生の意見箱の要望件数

店舗	遊び場	交通	ｲﾝﾌﾗ	原発	その他
20	10	14	13	2	6

5. 結論

本研究では、一般市民と高校生といった、立場が違う住民では、都市問題に対する捉え方が違うことがわかり、ワークショップでは一般の参加住民が高校生の問題に気付き、自分たちの重要な問題としてとらえることができた。以上のことより、参加住民の都市問題に対する意識の構造化が進展したと言える。

ただし、今回本研究で取り上げたのは様々な参加の場面の一部にすぎず、輪島市における住民意識の構造の過程全体を見るためには今後ヒアリング、談義、ニュースの分析が課題として残されている。